

平成21年度 文部科学省委託事業
総合的な放課後対策推進のための調査研究事業報告書

放課後活動支援モデル事業

(特別に支援の必要な子どもの活動機会充実のための取組)

特定非営利活動法人
知的障がい児者のあそび・せいかつ・しごと支援ネットワーク姫路

目 次

I	はじめに	2
II	「放課後活動支援モデル事業」の目的	2
III	研究の方法	2
IV	研究期間	2
V	研究	3
1	研究1	3
(1)	ボランティア養成講座の開設、運営	3
①	育成対象者（ボランティア養成講座受講生）の募集	
②	講座スタッフ	
③	ボランティア養成講座の日程、内容	
(2)	評価	5
①	評価調査用紙の作成	
②	評価・分析方法	
③	結果	
④	考察	
2	研究2	8
(1)	休日子ども教室の開設、運営	8
①	放課後活動（休日子ども教室）のプログラムの決定	
②	参加者募集と運営スタッフ	
(2)	休日子ども教室の延長	1 1
(3)	評価	1 1
①	評価調査用紙の作成	
②	評価・分析方法	
③	結果	
④	考察	
3	普及・啓発	1 4
(1)	報告書送付先	1 4
VI	おわりに	1 6

I はじめに

本報告書は、文部科学省から委託を受けた（特非）知的障がい児者のあそび・せいかつ・しごと支援ネットワーク姫路が「平成 21 年度総合的な放課後対策推進のための調査研究」の一環として取り組んだ「放課後活動支援モデル事業」の報告書である。

II 「放課後活動支援モデル事業」の目的

平成 19 年度から文部科学省と厚生労働省の連携の下、総合的な放課後対策として「放課後子どもプラン」の充実が図られてきた。しかし、障害のある児童生徒の放課後子ども教室への受け入れが進んでいるとは言えない。その理由として、専門的な知識を有するボランティアが少ない、活動プログラムの開発が不十分等があげられる。

こうしたことから、以下のことを研究目的とした「放課後活動支援モデル事業」に取り組んだ。

- 1 知的障害児の活動支援者の育成に向けた方策や効果的な研修プログラムを実践的に研究する。
- 2 知的障害児の放課後活動等のプログラム開発を実践的に研究する。
- 3 放課後子ども教室への知的障害児の受け入れ促進に向けた普及・啓発を図る。

III 研究の方法

（特非）知的障がい児者のあそび・せいかつ・しごと支援ネットワーク姫路（以下、NPO 法人）を中心とし、兵庫県教育委員会社会教育課、兵庫県立姫路特別支援学校（以下、支援学校）、兵庫県立姫路特別支援学校 P T A（以下、P T A）、姫路地区手をつなぐ育成会等の協力を得、上記目的を達成するため、以下の方法で研究を進めた。

- 1 研究 1（知的障害児の活動支援者の育成に向けた方策や効果的な研修プログラムに関する研究）

知的障害児の活動支援者育成に向けた方策として、支援学校ボランティア養成講座実行委員会、P T A の協力を得、知的障害児の支援者を育成するためのボランティア養成講座を開設し、講座プログラムの有効性を参加者の評価をもとに検証する。

- 2 研究 2（知的障害児の放課後活動のプログラム開発に関する研究）

P T A の協力を得、月 1 回、土曜日に開発プログラムにもとづいた活動（「休日子ども教室」と称した）を実施し、プログラムの有効性を参加者の評価をもとに検証する。

- 3 普及・啓発（放課後子ども教室への知的障害児の受け入れ促進に向けた普及・啓発を図る）

研究 1、研究 2 の成果をまとめた報告書を関係機関及び関係者に配布することで、知的障害児の放課後子ども教室等への受け入れ促進のための啓発を行う。

IV 研究期間

平成 21 年 6 月 8 日から平成 22 年 3 月 20 日まで

V 研究

1 研究1

(1) ボランティア養成講座の開設、運営

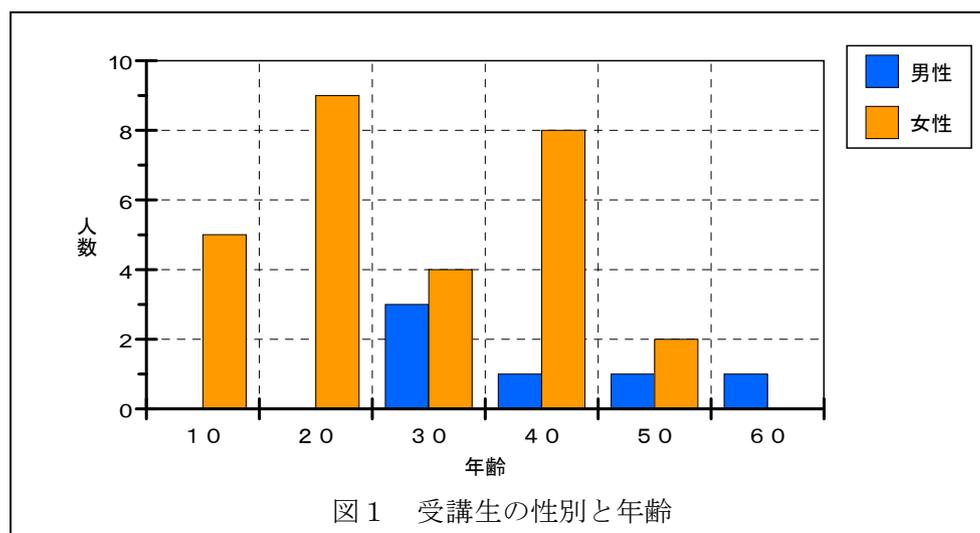
① 育成対象者（ボランティア養成講座受講生）の募集

活動支援者育成のためのボランティア養成講座を開設するにあたり、誰を育成の対象とするのか、その募集方法について検討した。支援学校が地域に対してセンター的機能の発揮を求められていることから、活動支援者を限定的にとらえるのではなく広く地域住民とする一方、要件を「年齢は高校生以上、性別は不問、知的障害児へのボランティア活動に興味がある」とすることにした。

募集方法は、ボランティア養成講座実施要項を地域ミニコミ誌（4紙）、市民活動・ボランティアサポートセンター、手をつなぐ育成会の協力を得、それぞれが発行している新聞や会報等に掲載した。加えて支援学校がある地域の自治会、姫路市作業所連絡会、姫路市教育委員会を通じて地域の小・中学校、支援学校を通じて高等学校へ募集パンフレットを配布した。

その結果、定員30名のところ40件を超える照会があり、そのうち36名を育成対象者（ボランティア養成講座受講生、以下、受講生）とした。

受講生の性別、年齢は下図（図1）のとおりで、年齢は16歳高校生から67歳会社員までと幅広いものになった。性別では男性6名、女性30名で女性が圧倒的に多かった。



また、これとは別に知的障害者の通う作業所から支援員の研修として理論講座のみの受講打診があり、彼らも受講生とした。

② 講座スタッフ

講座スタッフとして、理論講座の講師をNPO法人会員及び支援学校教員が担当し、実践講座の運営員をNPO法人会員ボランティアの他、支援学校教員も担当した。

さらに、講座の特徴とした「全実践講座を通じて、受講生が同じ子どもと関わる中で知的障害児への支援方法を学ぶ」を実現するため、実践講座の場とした研究2「休日子ども教室」に支援学校児童生徒の参加を求め、必要人数を受講生の支援を受けるボランティア対象児（以下、対象児）とした。こうした人たちにより講座は運営され、対象児、その保護者を含むスタッフ数は年間延べ人数で450名を超えた。

③ ボランティア養成講座の日程、内容

講座の日程は下表（表1）のとおりで、平成21年6月27日（土）から平成22年3月13日（土）までの期間、ほぼ月1回のペースで全10回の講座を計画した。受講生の学習時間数は研究2「休日子ども教室」のどの「くらぶ」に参加したかで少々異なるが、26.5～30.0時間であった。

表1 ボランティア養成講座の日程

	講座実施日	講座内容	学習時間
1	6月27日（土）	開講式 理論講座1 子どもを知る(障害の理解等)	3
2	7月11日（土）	理論講座2 あそび等を知る(関わり方理解等)	3.5
3	7月18日（土）	実践講座1 休日子ども教室見学	2~2.5
4	9月26日（土）	実践講座2 休日子ども教室参加	2~2.5
5	10月24日（土）	実践講座3 休日子ども教室参加	2~2.5
6	11月21日（土）	理論講座3 学校祭見学	2.5
7	12月19日（土）	実践講座4 休日子ども教室参加	3.5
8	1月23日（土）	実践講座5 休日子ども教室参加	2~2.5
9	2月20日（土）	実践講座6 休日子ども教室参加	2~2.5
10	3月13日（土）	実践講座7 休日子ども教室参加 閉講式	5.0
			27.5~ 30.0

講座内容は下表（表2）のとおりで理論と実践から構成した。理論講座では、知的障害児に関わるための必要な知識として、心理、病理、コミュニケーション方法等の理論の他、介助方法の実技について学ぶ。学習レベルは知的障害児に関わった経験のない人を想定し、難解な専門用語はできるだけさげ、わかりやすい表現やパワーポイント等の視覚補助教材も取り入れる工夫をした。

実践講座では、理論講座で学んだ知識、技能を知的障害児に関わることで確かめ、より

表2 ボランティア養成講座の講座内容

講座	内 容
理論講座	「障害の理解 I（知的障害とは何か）」 「障害の理解 II（発達障害について）」 「関わり方理解 I（コミュニケーションの方法）」 「関わり方理解 II（発作への対応、安定剤の服用、麻痺について等）」 「関わり方理解 III（自傷、他傷行為、パニック、こだわり等）」
実践講座	受講生が以下の休日子ども教室「くらぶ」のうち、1つに参加し具体的な関わり方を学ぶ。 「ハイキングくらぶ（学部を問わず山歩きが楽しめる親子等が参加）」 「音楽くらぶ（小学部、中学部の音楽好きの親子等が参加）」 「造形活動くらぶ（造形活動に興味があり、原則自力通学のできる高等部生徒が参加）」

具体的に学べるようにした。

(2) 評価

① 評価調査用紙の作成

評価調査用紙は、兵庫県教育委員会コミュニカレッジアンケート調査用紙（平成 18 年度）、支援学校ボランティア養成講座アンケート調査用紙（平成 20 年度）及び P T A 休日活動に関する調査用紙（平成 18 年度）を参考に作成した。

② 評価・分析方法

調査対象のうち受講生には、下表、調査用紙 1（表 3）を使用し、第 9 回ボランティア養成講座（平成 22 年 2 月 20 日）終了時に配布、無記名で回収した。対象児として参加協力をしている保護者（以下、対象児保護者）には、下表、調査用紙 2（表 4）を使用し、学級担任の協力を得て配布、無記名で回収した。調査は平成 22 年 2 月 8 日から 2 月 15 日までの間に行った。

結果は評価項目のうち選択項目は単純集計、自由記述項目は K J 法で分類項目を設定した後、その項目ごとに集計した。

表 3 評価調査用紙 1（受講生用）

1 アンケート回答者の年齢、性別について（該当するものに○をつけてください）

年齢 （ ・ 1 0 代 ・ 2 0 代 ・ 3 0 代 ・ 4 0 代 ・ 5 0 代 ・ 6 0 代 ）

性別 （ ・ 男性 ・ 女性 ）

2 受講動機について

あなたがボランティア養成講座を受講しようとした動機は何ですか。該当するもの全てに○をつけてください。

(1) 興味関心のある内容だから	(4) 参加する友達がいるから
(2) 勉強や仕事に役立つと考えたから	(5) その他（時間的ゆとりができたから、近くで開講するからなど）
(3) 公民館等が実施する他の講座より専門性が高い内容と思ったから	

3 講座への評価について

① あなたはボランティア養成講座を受講して「よかった」ですか。該当するものに○をつけてください。

(1) よかった	(3) どちらともいえない
(2) よくなかった	

② 「よかった」と答えた方、どのような点がよかったですか。該当するものに○をつけてください。

(1) 友達ができた	(4) 職業、学業に活かすことができた
(2) 講座内容がわかりやすかった	(5) その他
(3) 趣味に活かすことができた	

③ 「よくなかった」と答えた方、どのような点がよくなかったですか。該当するもの全てに○をつけてください。

<input type="checkbox"/>	(1) 友達ができなかった	<input type="checkbox"/>	(4) 職業、学業に役に立たなかった
<input type="checkbox"/>	(2) 講座内容がわかりにくかった	<input type="checkbox"/>	(5) その他
<input type="checkbox"/>	(3) 趣味に活かすことができなかった		

④ どちらともいえない」と回答した方、その理由を教えてください。

--

⑤ 講座内容について

講座は理論講座と実践講座で構成しています。それぞれの内容について、感想、意見を聞かせてください。

・理論講座について

--

・実践講座について

--

4 その他（運営を含め講座全体で気づかれたことがあれば書いてください。）

--

表4 評価調査用紙2（対象児保護者用）

・ボランティア養成講座の対象児として、休日子ども教室に参加された方にお尋ねします。

お子様を担当した受講生（ボランティア）の対応はどうか。

（ ・良かった ・良くなかった ・どちらともいえない ）

上記回答について、その理由を下にお書きください。

「良かった」と回答した方、どのようなところが良かったですか。その理由を教えてください。

--

「良くなかった」と回答した方、どのようなところが良くなかったですか。その理由を教えてください。

--

「どちらともいえない」と回答した方、その理由を教えてください。

--

③ 結果

(ア) 評価調査用紙の回収状況

受講生への評価調査用紙は36名中、29名を回収し、回収率は80.5%であった。対象児保護者への評価調査用紙は18名中、18名を回収し、回収率は100.0%であった。

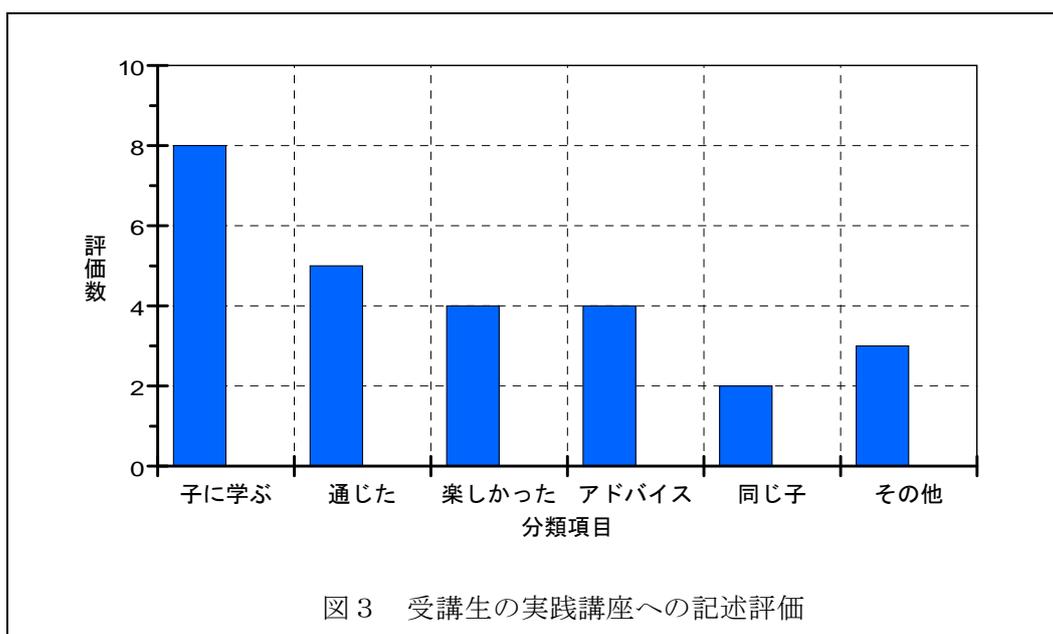
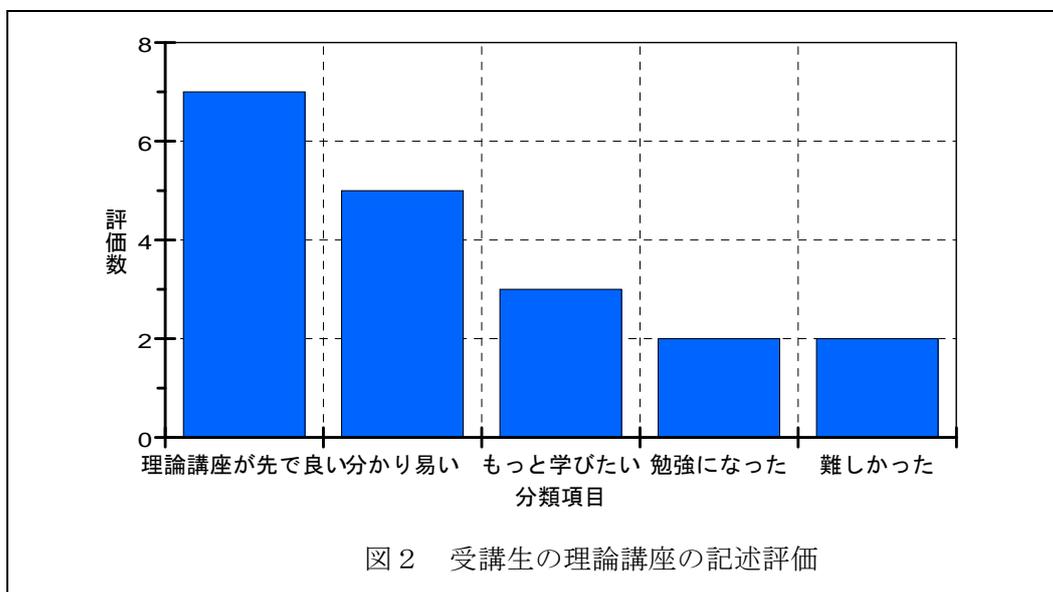
(イ) 講座への評価

受講生の講座への全般的な評価では年齢、性別、受講動機を問わず全員が「よかった」

を選択。理由の多い順に「講座内容がわかりやすかった」が 59.4%。「勉強や仕事に生かすことができた」が 25.0%。「友達ができた」が 9.4%。「趣味に活かすことができた」が 6.2%であった。

理論講座への評価は調査用紙回収者 29 名中、18 名が記述。分類項目で多かった順に下図（図 2）のとおり、「実践講座の前に理論講座が学べてよかった」「分かりやすい」「もっと学びたい」「勉強になった」「難しい内容が多かった」であった。

実践講座の評価は調査用紙回収者 29 名中、24 名が記述。評価は下図（図 3）のとおりで、多かった順に「対象児（図中は「子」）から学んだ」「対象児と気持ちを通じた時うれしかった」「対象児と関わったことが楽しかった」「スタッフのアドバイスが役に立った」「同じ対象児（図中は子）に関わったのが良かった」と続いた。



一方、対象児保護者の評価であるが、受講生を対象児への対応満足度は「よかった」が88.9%（18名中16名）。その理由として、「丁寧な対応」「懸命な姿勢」「親切」があげられた。「よくなかった」を選択した保護者はいなかったが、「どちらともいえない」が11.1%（18名中2名）であった。その理由は「対象児が受講生に慣れるのに時間が必要」「受講生が若すぎて不安」「受講生の活動報告が不十分」であった。

④ 考察

受講生のボランティア養成講座への全般的評価は極めて高い。理論講座においても「難しかった」という意見はあったが、日頃、知的障害児と関わりのない受講生からは、実技を含め、自作テキストの工夫、視覚的補助教材の活用で「分かりやすかった」「知的障害という障害が理解できた」「実践に役に立った」との感想を得た。実践講座においても「理論講座で学んだことが実感できた」「同じ対象児、同じ活動に関わられたので学びやすかった」「サポート体制があり、安心できた」等、講座構成を含めた育成プログラムの有効性を裏付ける感想を得ることができた。一方、対象児保護者の評価は、「講座（休日子ども教室）が月1回では少ない」「受講生の支援者としての資質に疑問がある」との意見もあったが、多くは受講生の懸命な態度、それを支えるスタッフを評価するものであった。

受講生、対象児保護者のこうした評価から、ボランティア養成講座が初心者には知的障害児への基本的な支援能力を身につけるのに有効なプログラムと判断できる。

一方、後述の研究2でふれるが、ボランティア養成講座とは別に受講生のうち希望者を対象とした活動（地域活動支援事業のタイムケアをイメージ、休日子ども教室と結びつけ活動時間の延長を目指した活動、延長活動と呼んだ）も設定した。この活動での学習内容は、ボランティア養成講座では体験できない食事介助やプログラムのない活動で個別に子どもとあそぶであった。参加受講生からの聞き取りでは「プログラムのない活動では子どもが何をしたいのか分からず、困った」「1対1で子どもに向き合って緊張した」「ボランティア養成講座（休日子ども教室）ではできない生活支援の経験ができたので、今後の活動に活かしたい」「集団と違って個の場合、子どもの別の面がみられた気がする」「担当の対象児とタイプの違う子どもだったので、全く対応の仕方が違った、指導員につきあい方のコツを教えてもらい、参考になった」という感想が返ってきた。いずれも対応の難しさを実感しながらも、活動支援者として良い経験になったというものであった。希望者のみではあったが、この活動も活動支援者を育成するのに有効な活動といえる。

しかし、一人の障害児をとおして支援方法全般を学ぶには限界がある。障害の多様化、重複化に対応できる支援者を育成するため、最新の知見や理論習得の他、実践経験の積み重ねは欠かせない。こうした学習や経験を身につける機会、継続した研修システムの開発が今後の課題である。

2 研究2

(1) 休日子ども教室の開設、運営

休日子ども教室を開設した目的は、放課後活動のプログラム開発にあるが、研究1で述

べたとおり活動支援者育成のための実践の場とするため、実施日時を放課後ではなく、ボランティア養成講座実施日にあわせた土曜日の午前中に行った。

① 放課後活動のプログラムの決定

プログラムの開発にあたり、PTAが平成11年から10年間取り組んだ交流会活動を参考にした。この活動は、学校週5日制への対応として実施されたもので、月1回、土曜日にハイキング、調理、潮干狩り、音楽鑑賞、バス旅行、もちつき、ボウリング等の活動が行われた。当初は、障害のある子どもにとって親子で楽しめる活動が見つげにくかったこともあり、平成15年には年間参加者数が1,400名を超え、1活動日あたりの平均参加者数は142名にのぼった。しかし、種々の福祉サービスが充実してくると、保護者の同伴が必要な活動、集団で楽しむ活動が敬遠されはじめ、平成20年には年間参加者数が支援者を含めてもピーク時の半数700名程度となり、子どもより支援者が多い日もあって、現在休止中である。

こうしたことから、研究2でのプログラムを「個人や親子でも楽しめる活動」「生活年齢、障害の程度を問わず参加できる活動」「年間を通じて支援学校及びその周辺でできる活動」「指導者の確保が容易な活動」をキーワードとして検討することにした。

その結果、条件を充たしたのが「音楽」「ハイキング」「造形」の活動であった。これらは、PTAの実績でみれば一定数の参加者が期待できることから、研究2の活動としてその有効性を検証することにした。さらに、それぞれの活動に特徴をもたせるため、参加対象者を「音楽くらぶ（活動に「くらぶ」をつけて活動名とした）」であれば、生活年齢が比較的低い児童、保護者と一緒に楽しむ、きょうだいも参加可能とした。「造形くらぶ」は、造形活動に興味があるが、休日に一人でテレビを見たりゲームをして過ごしているような高等部生徒とした。「ハイキングくらぶ」は、学部を問わず元気な児童生徒で、親子で軽い運動がしたい家族とした。

参加者の募集は、下表（表5）の活動要項を支援学校、PTAの協力を得、支援学校児童生徒に配布し行った。

表5 休日こども教室 活動要領

1 目的

障害のある人の活動を支援したい人（ボランティア養成講座受講生、NPO法人ボランティア、本校職員）と支援がほしい人（支援学校児童生徒、保護者）を結びつけ、音楽、造形、ハイキングの活動（休日こども教室と呼びます）を楽しみます。

2 各教室が募集する児童生徒

教室名	対象者	募集人数	参加の方法等
音楽くらぶ	小・中学部の児童生徒	親子15組程度	親子で音楽を楽しむ、きょうだいの参加は可能です、相談してください
造形くらぶ	高等部生徒	生徒のみ10名程度	造形活動が楽しめる生徒、保護者の参加は相談してください
ハイキングくらぶ	学部は不問	親子15組程度	親子で山歩きを楽しむ、きょうだいの参加も歓迎します

※ 申し込めるのは1教室だけです。年間をとおして、同じ教室での活動になります。

3 活動日時

日にち	月1回、土曜日。予定日は以下のとおりですが、学校行事等で変更になることがあります。その場合はお知らせします。 (5/16, 6/20, 7/18, 9/26, 10/24, 11/14, 12/19, 1/23, 2/20, 3/13)
時間	午前10時00分～12時00分

4 出欠確認

出席カードで出欠の確認をします。

5 登校方法

スクールバスはありません。送迎は、自力通学の生徒も含め、保護者の責任でお願いします。

6 活動場所

教室名	活動場所(予定)	その他(準備物)
音楽くらぶ	プレイルーム	必要ありません
造形くらぶ	陶芸室	汚れてもよい服装かエプロンを用意
ハイキングくらぶ	事務室前集合、学校周辺	雨天時は、校内でゲームを楽しみます

7 参加費等

参加費は無料ですが、造形くらぶは若干の材料費が必要です。また、事故対策として保険加入をお願いします(詳しくは、後日案内いたします)。

8 支援者

休日子ども教室への支援者として、支援学校職員ボランティア、NPO法人ボランティア、ボランティア養成講座受講生(9月25日から参加)が参加します。

9 その他

本活動について、お尋ねになりたいことがありましたら、支援部：〇〇までお願いします。

各「くらぶ」の活動プログラムは以下のとおり。

(ア) 音楽くらぶ

活動のねらいを「音楽を聴く、歌をうたう、リズムにあわせて身体を動かす、様々な楽器にふれる等の活動をとおり自己表現する」「音、音楽を介した活動の中で、他者を意識し認め合う場とする」とし、以下のプログラムを年間をとおり楽しむ。

①はじまりの歌～②あいさつの歌～③季節の歌～④楽器活動～⑤身体表現活動～⑥パラバルーン～⑦歌～⑧おわりの歌 (①、②、⑥、⑦、⑧は年間同じ曲を使用、他は季節に応じた曲、曲に合わせた小道具を工夫して使用)

(イ) 造形くらぶ

活動のねらいを「多様な造形活動を見たり、経験することで自己の世界や可能性を広げる」とし、下表のとおり、題材に季節感のあるもの、支援学校では扱わないような素材も楽しむ。

月	活動、素材	月	活動、素材
5月	バナナ写生、共同製作タペストリー	6月	紙粘土を使って魚を作る
7月	絵描き歌、シャボン玉、野菜はんこ	9月	粘土を使って食器づくり

月	活動、素材	月	活動、素材
10月	割り箸ペン、墨を使ってクロッキー	11月	手まわしロクロを使って丸を描く
12月	コラージュ技法でカレンダー作り	1月	コレクターボックスを作る
2月	フェルトを使って鬼の面づくり	3月	いちご写生

(ウ) ハイキングくらぶ

活動のねらいは「季節を感じながら自分のペースで山歩きを楽しむ」で、支援学校を起点にして戻ってくるコース（下表のとおり）を設定。いずれのコースも無理なく自分のペースで楽しめるもので、平均所要時間は子どもの脚力で1.5～2時間。コースは、季節、天気、参加者の希望で決めた。

コース名	コース	所用時間
元気コース	学校～キャンプ場～林道～仁寿山～学校	2.0時間
景色を楽しむコース	学校～キャンプ場～関電道～中学校裏～学校	1.5時間
楽々コース	学校～小学校裏山～麻生山前～中学校裏～学校	1.5時間
ジャングルコース	学校～アクティ裏～ジャングル～仁寿山～林道～学校	2.0時間

② 参加者募集と運営スタッフ

募集の結果、「音楽くらぶ」で小学部10組、中学部2組、計12組のきょうだいを含む親子、「造形くらぶ」で高等部1年生を中心として10名の生徒、「ハイキングくらぶ」では小・中・高等部のきょうだいを含む21組の親子がそれぞれ参加することになった。こうした43組、87名の参加者をNPO法人ボランティア、支援学校職員ボランティア20～30名の支援により活動は運営された。

ボランティア養成講座の実践講座開始後は、「休日子ども教室」参加者のうち保護者の理解、協力が得られた18名の児童生徒を支援対象児とし、対象児1名に受講生2名でグループをつくり、対象児への関わりを通して支援方法を学べるようにした。

(2) 休日子ども教室の延長

ここでは、休日子ども教室と福祉サービスをむすびつける試みとして、NPO法人が支援学校で行っているタイムケア事業（姫路市の地域生活支援事業。放課後の一定時間、支援学校の空き教室で児童生徒の活動を支援する）をもとにしながら、これとは別に延長活動を行った。

活動の対象者は休日子ども教室の参加者（児童生徒のみ）、ボランティア養成講座受講生のうちいずれも希望者とした。目的は、文字どおり休日子ども教室参加者にとって活動時間の延長であり、受講生にとってはボランティア養成講座では経験できなかった食事介助、プログラムのない活動での個別の子どもへの対応体験にある。実施日は休日子ども教室のある土曜日(9/26,10/24,11/14,1/23,2/20)の他、平日(10/16,12/8,1/15,1/22,)を含め9日間、指導はNPO法人のタイムケア支援員のうち業務外の者をあてた。参加者は児童生徒が9名、延べ人数で63名。受講生は見学を含め5名、延べ人数で27名の参加があった。

(3) 評価

① 評価調査用紙の作成

評価調査用紙は、支援学校ボランティア養成講座アンケート調査用紙（平成20年度）及びPTA休日活動に関する調査用紙（平成18年度）を参考にし作成した。

② 評価・分析方法

休日こども教室参加児童生徒の保護者43名を対象とし、下記調査用紙を使用し、無記名

で平成22年2月8日～2月15日に実施した。

結果は評価項目のうち選択項目は単純集計、クロス集計を行い、自由記述項目はKJ法で分類項目を設定した後、項目ごとに集計した。

休日子ども教室終了後、希望者を対象とした取り組みの「延長活動」に関しては、参加者への聞き取りで評価した。

表6 評価調査用紙（休日子ども教室用）

①～④の質問は、全員お答えください。

① お子様の所属学部はどこですか。（ ・小学部 ・中学部 ・高等部 ）

② 休日子ども教室のうち、どの活動に参加しましたか。

（ ・造形くらぶ ・音楽くらぶ ・ハイキングくらぶ ）

③ お子様（保護者様を含む）は活動を楽しめましたか。

※ ボランティア対象児でお子様の主としてボランティア養成講座受講生と活動した方は、受講生の活動報告をもとにしたり、当初保護者と参加した際の様子でお答えください。

（ ・楽しめた ・楽しめなかった ・どちらともいえない ）

③で選択した回答の理由をそれぞれ書いてください。

「楽しめた」と回答した方、どのようなところが良かったですか。その理由を教えてください。

--

「楽しめなかった」と回答した方、どのようなところが良くなかったですか。その理由を教えてください。

--

「どちらともいえない」と回答した方、その理由を教えてください。

--

④ 本年度の活動内容の改善点や次年度に望むことがあれば、教えてください。

--

休日子ども教室終了後、延長活動を利用された方だけ回答してください。

⑤ 児童ディサービス、タイムケア、日中短期などの福祉サービスとは別に文科省も放課後活動の充実を目指しています。支援学校の場合、「スクールバスで下校する」「スクールバスで下校しなければ、迎えに行かないといけない」方は少なくないという事情はありますが、放課後活動で望むことがありますか。実現可能、不可能は別にしてアイデアがあれば教えてください。

--

③ 結果

(ア) 評価調査用紙の回収状況

評価調査用紙は参加保護者 43 名中、34 名から回収し、回収率は 79.1%であった。延長活動は参加保護者 9 名中 7 名、受講生 5 名から直接の聞き取りを行った。

(イ) 休日子ども教室への評価

休日子ども教室への全般的評価では、所属学部に偏りなく「楽しめた」が 94.1% (34 名中 32 名)。「どちらともいえない」が 5.9% (34 名中 2 名)であった。「くらぶ」毎の評価は下表 (表 7) のとおりであり、調査人数の少なさによる差はあるが、参加者の多数は「楽しめた」といえる。

表 7 休日子ども教室への参加保護者の評価 (%)

	楽しめた	楽しめなかった	どちらともいえない	無回答
全 体	94.1 (32/34)	0.0 (0/34)	5.9 (2/34)	0.0 (0/34)
音楽くらぶ	90.0 (9/10)	0.0 (0/10)	10.0 (1/10)	0.0 (0/10)
造形くらぶ	88.9 (8/ 9)	0.0 (0/ 9)	11.1 (1/ 9)	0.0 (0/ 9)
ハイキングくらぶ	100.0 (14/14)	0.0 (0/14)	0.0 (0/14)	0.0 (0/14)

「楽しめた」理由だが、下表 (表 8) のとおりで全体からみれば「子どもが喜んだ」「知っている人と楽しんだ」「自分のペースで楽しめた」であった。一方、「どちらともいえない」と回答した理由は「子どもが好き勝手にしていたので、親としてハラハラした」「慣れるのに時間がかかる」というものであった。

表 8 「楽しめた」理由 (%)

良かったこと	くらぶ	造形	音楽	ハイキング	全体
色々な体験を楽しめた	30.0 (3/10)	28.6 (4/14)	0.0 (0/19)	0.0 (0/19)	16.3 (7/43)
自分のペースで楽しめた	10.0 (1/10)	7.1 (1/14)	36.8 (7/19)	36.8 (7/19)	20.9 (9/19)
知らない人 (ボランティア、受講生等) と楽しめた	10.0 (1/10)	7.1 (1/14)	7.1 (1/14)	31.6 (6/19)	18.6 (8/19)
知っている人 (友達、きょうだい、保護者) と楽しめた	20.0 (2/10)	28.6 (4/14)	28.6 (4/14)	15.8 (3/19)	20.9 (9/19)
子どもが喜んだ	30.0 (3/10)	28.6 (4/14)	28.6 (4/14)	15.8 (3/19)	23.3 (10/19)

(ウ) 延長活動への評価

保護者からは、異口同音に「長い時間はうれしい」「色々な活動に参加させたい」に加え「きょうだいがいるので障害のある子どもが参加できる活動が増えるとうれしい」との感想が寄せられ、延長活動は高い評価を得た。

④ 考察

参加者が参加条件を考慮し選択、参加した活動であったことから、休日子ども教室への評価は高い。個々の活動でみても、造形クラブ、音楽クラブの活動では「子どもが喜んだ」「知っている人と楽しめた（保護者、友達）」、さらに多様な活動を取り入れた工夫により、「色々な体験を楽しめた」との評価を得た。これらの評価から、ねらいどおり個人や家族で好きな活動が楽しめたと推測できる。

一方、ハイキングクラブでは「子どもが喜んだ」は前者の活動の半数程度と少なく、参加の動機が喜びより保護者自身あるいは子どもの健康を優先させたようである。それでも活動のねらいとした「自分のペースで楽しめた」が最多であったことから、集団活動ながらも個別の対応ができたといえる。予想外だったのは、「知らない人と楽しめた」が他の活動に比べ 3.5～5 倍に達したことである。理由として、受講生が支援者として参加したことにより、保護者の負担が減り子どもも保護者もゆとりが持て、活動を楽しむことができたものと考えられる。放課後活動と活動支援者育成のための活動を重ね合わせことが功を奏した。

これらのことから、音楽、造形、ハイキングの活動は放課後活動のプログラムとして有効であったといえる。

今後、こうした放課後活動により多くの児童生徒を取り込むには、子ども自身が参加したい、保護者が参加させたいと思う魅力的な活動をさらに開発できるか、活動場所及び恒常的に活動支援者が確保できるかにかかるといえる。これが課題である。

また、活動延長についても知的障害児に対して障害者自立支援法に基づく福祉サービスが充実しつつあり、放課後活動に併せてこれらを活用することで、放課後の時間が充実かつ多様化することを示唆している。

3 普及・啓発

放課後子ども教室等への知的障害児の受け入れ促進に向けた普及・啓発を図るため、研究 1、研究 2 の成果をまとめた本報告書を以下の関係機関及び関係者に配布する。

(1) 報告書送付先

① 兵庫県内の知的障害特別支援学校 (23 箇所)

No.	学 校 名	住 所
1	神戸特別支援学校	神戸市北区大脇台 1 0—1
2	阪神特別支援学校	西宮市田近野町 1 1—7
3	こやの里特別支援学校	伊丹市瑞ヶ丘 2—3—2
4	いなみ野特別支援学校	加古郡稲美野町国安 1 2 8 4—1
5	東はりま特別支援学校	加古郡播磨町北古田 1—1 7—1 7

6	北はりま特別支援学校	多可郡多可町中区間子602-1
7	高等特別支援学校	三田市大原梅の木1546-1
8	西はりま特別支援学校	たつの市新宮町光都1-3-1
9	播磨特別支援学校	たつの市揖西町中垣内乙135乙
10	姫路特別支援学校	姫路市四郷町東阿保字下戸明456
11	赤穂特別支援学校	赤穂市大津1305
12	出石特別支援学校	豊岡市出石町宮内2-8
13	氷上特別支援学校	丹波市春日町棚原3098-1
14	淡路特別支援学校	洲本市五色町下堺1062-2
15	神戸市立青陽東養護学校	神戸市灘区岩屋北町6-1-1
16	神戸市立青陽西養護学校	神戸市垂水区狩口台3-1-3
17	神戸市立青陽須磨支援学校	神戸市須磨区西落合1-1-4
18	三木市立三木特別支援学校	三木市志染町青山7-1-8
19	小野市立小野特別支援学校	小野市昭和町458-1
20	加西市立加西特別支援学校	加西市西笠原町172-50
21	神戸大学附属特別支援学校	明石市大久保町大窪2752-4
22	姫路市立書写養護学校	姫路市書写台3-151
23	姫路聴覚特別支援学校	姫路市本町68

② 県・市・町の教育委員会（13箇所）

No.	教育委員会名	住 所
1	兵庫県 教育委員会	神戸市中央区下山手通5-10-1
2	姫路市 教育委員会	姫路市安田4-1
3	高砂市 教育委員会	高砂市荒井町千鳥1-1-1
4	加古川市 教育委員会	加古川市加古川町北在家2000
5	たつの市 教育委員会	たつの市龍野町富永1005-1
6	相生市 教育委員会	相生市旭1-1-3
7	宍粟市 教育委員会	宍粟市山崎町中広瀬133-6
8	神崎郡神河町 教育委員会	神崎郡神河町寺前64
9	神崎郡市川町 教育委員会	神崎郡市川町西川辺165-3
10	神崎郡福崎町 教育委員会	神崎郡福崎町南田原3116-1
11	揖保郡太子町 教育委員会	揖保郡太子町鶴1369-1
12	神戸市 教育委員会	神戸市中央区加納町6-5-1
13	明石市 教育委員会	明石市中崎1-5-1

③ 市・町の障害担当課（支援学校児童・生徒の住所がある地域、6箇所）

No.	障害担当課名	住 所
-----	--------	-----

1	姫路市 障害福祉課	姫路市安田4-1
2	高砂市 障害福祉課	高砂市荒井町千鳥1-1-1
3	神崎郡神河町 健康福祉課	神崎郡神河町栗賀630
4	神崎郡市川町 健康福祉課	神崎郡市川町西川辺165-3
5	神崎郡福崎町 健康福祉課	神崎郡福崎町南田原3116-1
6	揖保郡太子町 社会福祉課	揖保郡太子町鷗1369-1

④ 福祉施設等（7箇所）

No.	関係機関名	住 所
1	姫路地区手をつなぐ育成会	姫路市安田3-1 自治福祉会館4階
2	加古川はぐるまの家	加古川市山手1-11-10
3	社会福祉法人 中播福祉会香翠寮	姫路市香寺町土師365-1
4	姫路市障害者職業自立センター	姫路市御立西5-6-26
5	姫路市障害者相談支援センター 「りんく」	姫路市安田3-1 自治福祉会館1階
6	社会福祉法人 よい子の広場福祉会 書写ひまわりホーム	姫路市書写634-50
7	姫路市総合福祉通園センター ルネス花北	姫路市増位新町2-37

⑤ 関係者（118名）

休日子ども教室参加者、ボランティア養成講座参加者等

VI おわりに

平成22年3月13日にボランティア養成講座、休日子ども教室ともに無事終了することができた。ボランティア養成講座では活動終了後に閉講式が行われ、30名の受講生に活動支援者の証として修了証（出席率60%以上で修了とした）が手渡された。これは、開講後、勤務日の変更や家庭の都合で受講を中止せざるを得なかった4名の受講生を除けば32名中の数字であり、修了率は93.8%にのぼる。さらに、この30名のうち、今後のボランティア活動先の紹介を希望した者22名については、学齢期の子どもへのボランティア先として、本NPO法人、姫路市総合福祉通園センター、社会福祉法人よい子の広場福祉会、社会福祉法あいむ等に依頼した。さらに成人を希望した者には姫路市作業所連絡会に依頼し、ここを介して市内33箇所の作業所のいずれかで活動ができるようにした。

こうしたことは、開講当初受講生が抱いていたであろう「知的障害のある人の活動を支援したい」という気持ちを活動支援者育成プログラムが育んだ結果と考える。また、作業所支援員を研修者として受け入れ、当該の施設長に次年度の研修を依頼されたことも含め、研究1の成果が地域に波及することも期待したい。

一方、休日子ども教室では、知的障害児、きょうだい、保護者、受講生、地域ボランティア、学校職員等多様な人々が集い、楽しんだ活動であった。こうした活動は放課後活動の実施だけでなく、障害のある人が地域で普通に生きていくことを目指す社会にとっても有用と考える。また、休日子ども教室の活動終了後、参加保護者から活動内容を聞いたPTAから共催という形で休止中のPTA活動再開の打診があった。こうした広がりも研究2の成果といえる。

さらに、研究1、研究2の成果を組み合わせると「活動支援者を育成しながら障害児の放課後活動を運営し、活動支援者を地域資源として地域に返す」というモデルになる。支援学校と地域のボランティア団体等が連携し、このような活動を実施すれば事業目的である「障害のある児童生徒の放課後活動」充実に十分寄与できると考える。

最後に、研究を進めるにあたり、地域、支援学校で新型インフルエンザが流行し、活動実施が危ぶまれることが何回もあった。しかし、対象児として参加した支援学校児童生徒をはじめ、保護者、支援学校職員、受講生、ボランティア等、多くの人から惜しみない支援、協力をいただき、計画どおり進めることができた。

また、企画に関して兵庫県教育委員会社会教育課、支援学校ボランティア養成講座実行委員会、姫路地区手をつなぐ育成会、姫路作業所連絡会等から貴重な助言をいただいた。

こうした方々に深く感謝するとともに、心からお礼を申し上げたい。